

温かい海  
吹浦

心

ミなど下る。淵庵不玉と云醫師のもとを宿とす。

あつミ山や吹浦かけて夕す、み

暑き日を海にいれたり最上河  $3/5$

江山水陸の風光数を盡して、今象潟に

方付を責。酒田のみなとより東北の方、山を

越、磯を伝ひ、いざこをふみて、其際十里、

日影や、かたふく比、汐風真砂を吹上げ、

雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に

莫作して、雨も又奇也とせば、雨後の晴色

又たのもしと、あまの若屋に膝をいれて

雨の晴を待。その朝、天能葵て、朝日

はなやかにさし出るほとに、象潟に舟をうかふ。

先能因嶋に舟をよせて、三年幽居

のあとをとふらひ、むかふの岸に舟をあかれは、

「花のうへごとく」とよまれしさくらの老木、

西行法師のかたみをのこす。江上に御陵あり。

神功后皇の御墓といふ。寺を干満珠寺と云。此所

に行幸ありし事いまだ聞す。いかなることや。

此寺の方丈に座して簾を捲は、風景一眼の中に

盡て、南に鳥海天をさ、え、その影うつりて

江に有。西ハむやくの関路をかきり、東に

堤を築て、秋田にかよふ道遙に、海北

にかまえて、浪うち入る、ところを汐こしと

云。江の縦横一里はかり、佛まつしまに

かよひて又異なり。松嶋ハ笑ふかことく、

きさかたハうらむるかことし。寂しさに

悲しみをくはえて、地勢魂をなやます

に似たり。

象潟や雨に西施かぬふの花

しほこしや鶴はきぬれて海涼し

祭礼

きさかたや料理何くふ神祭

ミの、くくの商人

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

曾良

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

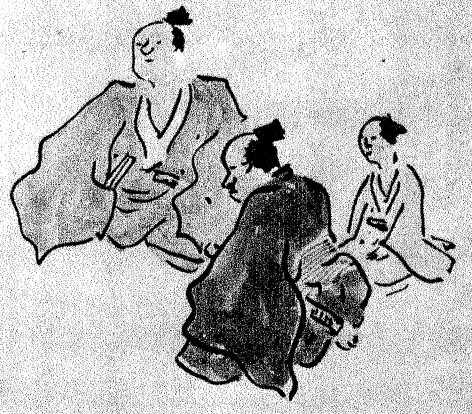
酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ

て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の

雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ



酒田のなごり日をかさねて、北陸道の  
雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ  
て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

酒田のなごり日をかさねて、北陸道の  
雲にのみ、はるくのおもひ胸をいたましめ  
て、加賀の府まで百三十里ときく。金泥

市振

鼠か関をこゆれば、越後の地に歩行をあらためて、越中の国一ふりの関に到る。この間九日、暑湿の勞に神をなやまし、病おこりてことをしるさず。

ふ三月や六日も常の夜にハ似す  
あらうみや佐渡によこたふ天河

親不知  
子不知  
犬不知  
馬不知

今日ハ、おやしちす。子しらす。犬もとり。駒返しなど、云北国一の難所を越て、つけれ侍れハ、まくら引よせて寝たるに、一間へたて、面のかたに、若き女の声

二人はかりと聞ゆ。年老たるおのこの声もましりて、物かたりするを聞は、越後の国新瀧といふところの遊女なりし。

伊勢

いせ参宮するとして、此関までおのこの送りて、あすハ古郷にかへす。ふした、めて、はかなき言伝などしやる也。

「白浪のよする汀に身をはふらかし、あまのこの世をあさましう下りて、

さためなき契、日々の業因、いかにつたなし」と物云をさくく寝入て、

あした旅立に、我々にむかひて、「行衛しらぬたひ路の邊さ、あまりおほつかうかなしく侍れは、見へかくれにも御跡をしたひ侍らむ。

衣のうへの御情に大慈のめくみをたれて、結縁せさせ給へ」と、なみたを落す。「不便の事」ハ侍れとも、我々ハ所々にてと、まる

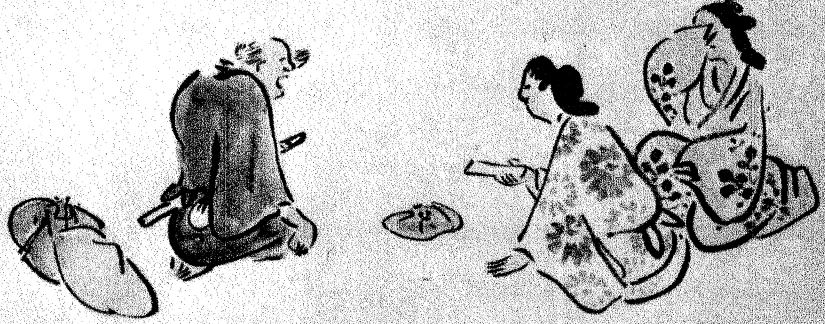
かた多し。只人の行にまかせて行へし。神明の加護かならずつ、かながるへし」と、云すて、出つ。あはれさしはらくやまさりけらし。

一家に遊女も寝たり萩と月の  
曾良にかたれば、書と、め侍る。

1) 行衛と遊女江口の名伝説(新古今傳、謡曲江口他)  
2) 津風寒く吹くし奈波の海人の釣する小舟浦かかると見ゆ(大伴家持)

3) 奈波の海人の釣する小舟浦かかると見ゆ(大伴家持)  
4) 奈波の海人の釣する小舟浦かかると見ゆ(大伴家持)  
5) 奈波の海人の釣する小舟浦かかると見ゆ(大伴家持)

3) 多岐の海に底さへにほふ藤流をかざしてゆかぬ見ぬ人のため(次官内蔵少輔藤原氏万葉集十九)  
4) 奈波の海に釣する小舟浦かかると見ゆ(大伴家持万葉集十九)



くろへ四十八瀬とかや、数しらぬ川を  
わたりて、那古といふ浦に出。たこの藤浪ハ  
春ならずとも、はつ秋のあはれとふへき  
ものをとて、人に尋れば、「これより五里磯  
つたひして、むかふの山陰にいり、蟹の苦  
ふきかすかなれば、あしのひとよの宿かすもの  
あるまし」と、いひをとされて、かゝのくに、入。

くろへ四十八瀬とかや、数しらぬ川を  
わたりて、那古といふ浦に出。たこの藤浪ハ  
春ならずとも、はつ秋のあはれとふへき  
ものをとて、人に尋れば、「これより五里磯  
つたひして、むかふの山陰にいり、蟹の苦  
ふきかすかなれば、あしのひとよの宿かすもの  
あるまし」と、いひをとされて、かゝのくに、入。

くろへ四十八瀬とかや、数しらぬ川を  
わたりて、那古といふ浦に出。たこの藤浪ハ  
春ならずとも、はつ秋のあはれとふへき  
ものをとて、人に尋れば、「これより五里磯  
つたひして、むかふの山陰にいり、蟹の苦  
ふきかすかなれば、あしのひとよの宿かすもの  
あるまし」と、いひをとされて、かゝのくに、入。



七月中の五日也。こゝに大阪よりかよふ商人何處といふもの有。それが旅宿をとともにす。一笑と云者ハ、此道にすける名のほのく聞へて、世に知人も待しに、去年の冬早世したりとて、其兄追善を催すに、

塚もうこけ我なく声ハ秋の風  
ある舂庵にいさなハれて  
秋涼し手ことにむけや瓜茄子  
途中

あか〜と日ハつれなくも秋のかせ  
小松と云ところにて

此ところ、太田の神社に実盛が甲・錦のきれ有。往昔、源氏に属せし時、義朝公より給ハらせ給ふとかや。けにも平土のものにあらず。目庇より吹返しまて、菊からくさのほり物、金をちりはめ、龍頭に敏形打たり。実盛討死の、ち、木曾義仲願状にそへて、此社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事とも、まのあたり縁記に見へたり。

むさんやな甲の下のきりくす

山中の温泉に行ほと、白根か嶽あとに  
みなしてあゆむ。左の山際に観音堂  
あり。花山の法皇三十三所の巡礼  
とけさせ給ひて、大慈大悲の像を  
安置し給ひて、那谷と名付給ふとかや。  
那智・谷組の二字をわかち侍し  
とそ。奇石さまくに、古松植ならへて、  
蒼ふきの小堂岩のうへに造りかけて、  
殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風  
温泉に浴す。其功有馬に次と云。  
山中や菊ハたおらぬ湯の匂  
あるしとするものハ久米之助とて  
いま小童也。かれか父講語を好ミ、  
洛の貞室若輩のむかし、こゝに

近の山子... 山中の温泉... 白根か嶽... 花山の法皇... 那智・谷組... 奇石さま... 古松植... 殊勝の土地... 石山の石より白し秋の風... 温泉に浴す... 山中や菊ハたおらぬ湯の匂... あるしとするものハ久米之助とて... いま小童也... 洛の貞室若輩のむかし、こゝに

来りし比、風雅に辱しめられて、洛に  
歸りて貞徳の門人となりて世に仕らる。  
功名の、ち、この一村、判詞の料を受すと  
云。今さらむかしかたりとハなりぬ。  
曾良ハ腹を病て、いせのくに長嶋  
といふところにゆかりあれば、先たちて行に、  
行くてたふれふすとも萩の原、曾良  
と書置たり。行もの、かなしみ、のこる  
もの、うらみ、雙鹿のおかれて雲に  
まよふかことし。予も又、  
けふよりや書付消さむ笠の露



曾良の書置の物語

山中の温泉... 白根か嶽... 花山の法皇... 那智・谷組... 奇石さま... 古松植... 殊勝の土地... 石山の石より白し秋の風... 温泉に浴す... 山中や菊ハたおらぬ湯の匂... あるしとするものハ久米之助とて... いま小童也... 洛の貞室若輩のむかし、こゝに

大なるまぢる城外金昌寺と云寺に  
 たるる。猶加賀の地なり。曾良も  
 前の夜此寺に泊りて、  
 よもすから秋風聞やうらの山  
 とのこす。一夜の隔千里に同じ。  
 吾も秋風を聞て衆寮に臥は、  
 明ほの、空ちかう、読経声すむま、  
 に、鐘板鳴て食堂に入。  
 けふハ越前の国へと、こゝろ早卒にして  
 堂下に下るを、若き憎とも  
 紙硯をか、え、階のもとまで追来る。  
 折ふし庭中の柳ちれば、  
 庭掃て出るや寺に散柳  
 とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。

大なるまぢる城外金昌寺と云寺に  
 たるる。猶加賀の地なり。曾良も  
 前の夜此寺に泊りて、  
 よもすから秋風聞やうらの山  
 とのこす。一夜の隔千里に同じ。  
 吾も秋風を聞て衆寮に臥は、  
 明ほの、空ちかう、読経声すむま、  
 に、鐘板鳴て食堂に入。  
 けふハ越前の国へと、こゝろ早卒にして  
 堂下に下るを、若き憎とも  
 紙硯をか、え、階のもとまで追来る。  
 折ふし庭中の柳ちれば、  
 庭掃て出るや寺に散柳  
 とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。



ひらののまをばり入はるまじり  
 想はうとてまじりあつるまじり  
 よもすから秋風聞やうらの山  
 とのこす。一夜の隔千里に同じ。  
 吾も秋風を聞て衆寮に臥は、  
 明ほの、空ちかう、読経声すむま、  
 に、鐘板鳴て食堂に入。  
 けふハ越前の国へと、こゝろ早卒にして  
 堂下に下るを、若き憎とも  
 紙硯をか、え、階のもとまで追来る。  
 折ふし庭中の柳ちれば、  
 庭掃て出るや寺に散柳  
 とりあへぬさまして、草鞋ながら書捨つ。

越前

越前のくに、吉崎の入江を舟に  
 棹さして、しほこしのまつを尋ぬ。  
 よもすから嵐に波をはこはせて  
 月をたれたる汐こしの松 西行  
 此一首にて数景盡たり。もし  
 一弁を加ふるものハ、無用の指を  
 立るかことし。  
 丸岡天龍寺の長老、古き  
 因あれは尋ぬ。又金沢の北枝  
 といふもの、かりそめに見送りて、  
 此ところまでしたひ来る。所々の  
 風景過ぎすおもひつ、けて、  
 折ふしあはれなる作意など聞ゆ。  
 今既別にのそみて、  
 物書て扇引さくなこりかな  
 五十丁山に入て永平寺を礼す。  
 道元禪師の御寺也。邦畿千里  
 を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、  
 尊きゆへ有とかや。

丸岡天龍寺の長老、古き  
 因あれは尋ぬ。又金沢の北枝  
 といふもの、かりそめに見送りて、  
 此ところまでしたひ来る。所々の  
 風景過ぎすおもひつ、けて、  
 折ふしあはれなる作意など聞ゆ。  
 今既別にのそみて、  
 物書て扇引さくなこりかな  
 五十丁山に入て永平寺を礼す。  
 道元禪師の御寺也。邦畿千里  
 を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、  
 尊きゆへ有とかや。